

世界農業遺産 (GIAHS) に関する考察

—— 『会津農書』と “Walden” の視点から ——

稜川信弘*

A Study on Globally Important Agricultural Heritage Systems
(GIAHS)

On a viewpoint of “Aizu Nousho” and “Walden”

HARAIKAWA Nobuhiro

Abstract

“The virtues of a superior man are like the wind; the virtues of a common man are like the grass; the grass, when the wind passes over it, bends.”
(H.D.Thoreau, “Walden”).

This essay focuses on the resilience as the factor of sustainability, which is related to the restoration from such serious stresses as disasters and man-made calamities. Meanwhile, FAO’s GIAHS (Globally Important Agricultural Heritage Systems) regards the resilience as the important factor of sustainability in rural areas and finds out the traditional farming systems continued a long time together with their inherent culture, landscape and biodiversity. On such an issue, we can recognize some critical issues on the essential factors of resilience in “Aizu Nousho” written by Saze Yojiemon in 1684 and “Walden” written by H.D.Thoreau in 1854. We think that they are suggestive to know how to manage the rural resources to improve the sustainability and make harmonize our conscious and behavior with both the economic and ecological justice.

* 東北文化学園大学総合政策学部講師

1. はじめに－問題提起－

一般に、システムの持続性はそれを維持する外部環境との相互作用によって保持されており、システムの内部要因は外部環境とのかかわりにおいて具象化しようと考えられる。とはいえ、複雑多岐にわたる両者の交流経路の選択対象を誤れば本質と特殊性を混同することになる。世界農業遺産(GIAHS)は現存する伝統的農業方式の中から原型^{プロトタイプ}を選抜し、多様な環境(地域性)に適応した持続可能な農業システムの成立要因を解明するとともに、その普及を図ろうとするプロジェクトであると考えられる(附表参照)¹⁾。

本稿は持続性(sustainability)とその構成要因の一つとしての弾力性(resilience²⁾)との関係に着目し、①佐瀬与次右衛門³⁾の『会津農書』、②H. D. Thoreau⁴⁾の“Walden”、③GIAHS⁵⁾という三つの視点から、地球規模の激甚災害⁶⁾が懸念される状況下で対抗軸としての「農」にかかわる知的=技術的遺産を将来世代に継承するための理念と方法について考察したい。

-
- 1) 「伝統」を実行可能性(feasibility)で峻別し、活動的伝統(active-tradition)に内在する「持続性」要因を検出しようとする GIAHS は、歴史的過程において地域性との相性という評価軸で異文化を受容し、熟成してきたわが国の融合的文化の特質と調和的であると考えられる。
 - 2) 英和辞典では、「1 はね返り、飛び返り、弾力、弾性、反発力。2 元気の回復力、快活性、不幸・変化からの回復[順応]力。3《物理・機械》弾性エネルギー《弾性物体内に蓄えられる弾性変形によるエネルギー》」(竹林[2002], p.2,094)と説明されている。一般に、「回復力」または「復元力」と訳されるが、本稿では災害がもたらす種々のストレスを跳ね返す反発力という点に着目して「弾力性」という用語を当てたい。
 - 3) 『会津農書』の著者(1630 - 1711年)。寛永七年、幕内に生まれ、翌年の洪水による村の流出、寛永十年の洪水による全村移転を経験した。10代より父克盛の補佐役を務め、寛文二年(1662年)より(小割元改め)肝煎として地域の農業・農法・農村生活の発展・普及に尽くし、隠居後も農業指導者として尽力した。(長谷川[1968], pp.11-36, 佐瀬[1982a], pp.229-236)。
 - 4) “Walden”の著者(1817 - '62年)。米国東部コンコード(ボストンの北西約30km)に生まれ、その地で亡くなる。西洋と東洋の思想的融合を目指した超越主義的(transcendental)視点に基づいて自然環境と調和し、戦争や差別のない持続的社会を提起した先駆者と考えられる。
 - 5) 世界農業遺産は「社会や環境に適応しながら何世代にもわたり形づくられてきた農業上の土地利用、伝統的な農業と、それに関わって育まれた文化、ランドスケープ、生物多様性などが一体となった」農業システムを対象に、「コミュニティの環境及び持続可能な開発に対するニーズと志向とコミュニティの共適応により発展してきた」土地利用方式を抽出し、活力を以て現存する持続性という稀少要素の種子を選抜し、その核となる要因を検出しつつある。農水省の以下のHPを2015年9月22日閲覧(http://www.maff.go.jp/j/nousin/kantai/pdf/004_giahs_pamphlet.pdf)。
 - 6) 人間活動由来の公害、地球温暖化(気候変動)、生物種の絶滅による生物多様性の危機、核実験や原発事故による放射能汚染などはその典型的事象であると考えられる。

2. プロローグ－転石苔むさず⁷⁾－

迂回的ではあるが、夏目漱石の講演録を引用したい。明治44年(1911年)8月15日、漱石は和歌山県会議事堂で「現代日本の開化」と題する講演を行い、開化を「人間活力の発現」とし、それを2つに分けた。すなわち、量的圧搾^{あつさく}を求める省力欲求を原動力とする「活力節約」と、それとは逆に活力消耗を望む「道楽」である(小森[2016], p.62-65)。

「面倒を避けたい横着心^{めんどう おうちゃくしん}」が交通・通信手段や機械力という「怪物」による時間短縮と労力最小化を生み、節約された時間によって「道楽」が「留め度もなく前進する」。つまり、省力化を追求する「発明」や「器械力」とそれが生み出す「娯楽^{あそび}」への限らない欲望との「千変万化錯綜^{せんべんばんげさくそう}」した状態が「開化」であり、その豊かさが「不安や努力」を減らすことはない(小森[2016], p.65-70)。また、「西洋人が百年も掛ってようやく到着し得た分化の極端」に辿り着こうとして「皮相上滑り^{うわすべ}」(小森[2016], p.81)の「開化」を追い求め、それを自発的と錯覚している日本人の「集合意識」は状況によって「戦争の意識だけ」に動いてしまう危うさを漱石は指摘した(小森[2016], p.77-82)。日露戦争の直中⁸⁾、「猫」の視点から日本人を戯画化した作品の著者の警句はいかに理解されたのだろうか。

漱石は転石の如き人間の意識をまるで落語のネタのように用いて⁹⁾聴衆を揶揄し¹⁰⁾、「笑い」の力を借りて聴衆との心理的一体感を図ろうとしたと推測される。江戸情緒を巧みに取り入れて聴衆を笑いの渦に巻き込む熟練の話者である漱石とは異なり、若きソロー¹¹⁾はまるで隣人の暮らしを嘲笑している

7) “A rolling stone gathers no moss.” そのニュアンスは否定的な英国(不毛・浅薄)と肯定的な米国(活発・清新)との間で異なることもある。(竹林[2002], p.2,133)

8) 日露戦争2年目(1905年)の1月に、当初は俳句雑誌『ホトトギス』に読み切り小説として発表された『吾輩は猫である』は、戦争報道一色の世情に対して反旗を翻すかのような「猫から見た人間の世界を笑い飛ばす」過激な小説(小森[2013],p.15)であった。

9) 漱石を柳家小さん(三代目)と並ぶ江戸趣味の伝承者とする書評が明治39年4月の『新潮』に掲載された(漱石文学研究会[2016], p.96)。生家近くに寄席があった金之助は講釈を聞くのが好きな子供だったらしい。「長じて漱石は落語に凝ったそうだ。ちゃきちゃきの江戸っ子だった漱石には、落語家が語る江戸前のべらんめえ台詞が、心地よく耳に響いていたのだろう」(白石弘[2016], pp.80-81)。漱石は三代目小さんを小説『三四郎』にも登場させている。

10) 講演の最初は趣旨が理解できず、少し面白くなるとすぐに退屈し始め、1時間後には欠伸が出る始末であるが、それは社会意識の変化にも応用できるとした(小森[2016], pp.75-78)。

11) 20代最後の2年を森で暮らし後、“Walden”の執筆に7年をかけた30代のソロー。

かのように思える¹²⁾。しかし、誤解から生じた軋轢の先には、同時代人が直面している社会問題を描き出し¹³⁾、農民が「生計の問題を、問題自体よりもずっと複雑な公式を使って解こうとして¹⁴⁾」(ソロー・飯田[1995a], p.63)豊かな可能性を自ら放棄するという¹⁵⁾愚行の改善を図ろうとした苦闘の軌跡が垣間見える。

ソローは、「湖の水まで枯渇させようとした」フリンツを登場させ、「この男の農場では、なにひとつただのものは育たない」、「野に花は咲かず、木に実は結ばず、育っているのはドルばかり」(ソロー・飯田[1995b], p.46)と批判することで自らの立場を明らかにする。「Walden」は反自然的であるがゆえに、非持続的な「モデル農業」の性格を浮き彫りにし、それを支える移民の暮らしを対置させてその非人道性を明らかにしていく。泥沼に浸かりながら必死に働き、「1 エーカーにつき十ドルで、鋤や沼地用の鋏を用いて草地を耕し、その土地を1年間、肥料つきで使わせてもらっている」アイルランド人移民の話聞いたソローはその混沌状態から抜け出す算段を教えようと試みる。だが、フィールド夫妻は嘆息するばかりであった。時代の潮流に翻弄される人間の心を豊かにする方法の基軸を「計算力」(arithmetic)に求め、その欠落が「失敗」の原因であるとするソローの計算力とは教養を象徴する表現ではないか¹⁶⁾。その点において、ソローの「弾力性」は漱石の「開化論」につながると考えられる¹⁷⁾ (ソロー・飯田[1995b], pp.65-68)。

12) 難行苦行に明け暮れ、余計な心配や重労働に苦しみ、働き過ぎて誠実に生きる暇が持てないと住民の日常を描写している(ソロー・飯田[1995a], pp.11-14)。

13) 「職工たちの労働条件は、日一日とイギリスの状態に近づいている。(中略)私が見聞したかぎりでは、工場制度の主たる目的は、人間が正直に働いた金でちゃんと服を着られるようにすることではなく、明らかに会社を肥らせることにある」(ソロー・飯田[1995a], p.52)。

14) 「小さな資本家としての彼にとって絶対的な制限として現れるものは、本来の費用を差し引いてから彼が自分自身に支払う労賃にほかならない」(マルクス・p.1,033)。

15) 「南部に奴隷労働者がいるのはやりきれないが(中略)いちばんやりきれないのは、自分自身を奴隷にしている奴隷労働者がいることだ。(中略)自分というものをどう考えるかが、その人間の運命を決定、もしくは示唆する」(ソロー・飯田[1995a], pp.16-17)

16) 兄ジョンと Concord Academy を運営していた1840年秋、「ソローは水準測量と地平測角が両方できる道具を購入し、測量をカリキュラムに導入し、数学の授業をより実用的で生き生きとしたものにした」(ハーディング・山口[2005], p.118)

17) 「数学的な一点をめざすことによつてのみ、われわれは賢くなるのだが、これは一生の指針としても十分に通用する。」(ソロー・飯田[1995a], p.127) “It is by a mathematical point only that we are wise, … that is sufficient guidance for all our life.” (Thoreau[1854], p.46)

3. 「時空」の共有

3-1 農的生活の含意

時の流れは川の流れに視覚化され¹⁸⁾、同じ対象を異時点間で繋げば変化量を知ることも可能だろう。互いの目を通して見ることによって、僅か一時間で世界の全時代を生きる偉大な奇跡について語りかける¹⁹⁾ (ソロー・飯田 [1995a], p.23) “Walden” において、「互いの目を通して見る」(“look through each other’s eyes”)とは、計算力と教育との関係と同様に、「相手の目線に立つ」ほどの意味であり、瞬時に全ての時空間の存在の目線に立つには、「則天去私²⁰⁾」の心境に至る程の精神修養が求められるだろう²¹⁾。「思慮深く生き、人生の本質的な事実のみ」(ソロー・飯田 [1995a], p.162) に向き合った²²⁾ 2年余りの生活時間は、ソローに人間らしい生き方²³⁾ とともに「互いの目を通して見る」ことの重要性を事後的に²⁴⁾ 確信させたのではないだろうか。時間は主観的には伸縮可能であるが²⁵⁾ (ソロー・飯田 [1995b], p.281-282)、客観的に定量化されることによって市場での交換価値が成立する²⁶⁾。だが、心がその枠組みのみに囚われた場合、労働者の生活はその対価である賃金によって

18) 「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」(武田友宏 [2007], p.14)。「われわれの内なる生命は、川の水のようなものである」(ソロー・飯田 [1995b], p.292)。

19) “Could a greater miracle take place than for us to look through each other’s eyes for an instant?”, “We should live in all the ages of the world in an hour … in all the worlds of the ages.” (Thoreau [1854], p.6)

20) 「夏目漱石が晩年理想とした心境。我執を捨て諦観にも似た調和的な世界に身をまかせる」(松村明 [2006], p.1.467)とは、ソローが“Walden”に記載した「私は東洋人の言う冥想とか、無為という言葉の意味を悟った」、「自分の暮らしそのものが楽しみであり、いつも新鮮さを失わなかった」などの感覚に近いものではないだろうか(ソロー・飯田 [1995a], p.202)。

21) 熊澤蕃山の「太虚」に通じる儒教的精神世界を彷彿させるが、その点に関しては後述する。

22) “live deliberately, to front only the essential fact of life” (Thoreau [1854], p.59)

23) “I did not wish to live what was not life” (Thoreau [1854], p.59)

24) ここでの「事後」とは、“Walden”を執筆していた7年間のみならず、その後、森で暮らしから修得した指針に従って暮らし続けたソローの人生を指している。

25) 「彼は杖をつくることによって、ひとつの新しい宇宙を、完全な美しい均整をもった、ひとつの世界を生み出していた(中略)足もとに堆く積まれた、まだ新しい削り屑を見て、自分と自分の作品にとっては、それまでの時間の経過が単なる幻想にすぎなかったこと、ブラフマンの脳からとび散ったひとかけらの火花が、人間の脳の火口の上に落ちて発火するのに必要な時間しか経過していなかったことを悟った」(ソロー・飯田 [1995b], pp.281-282)。

26) ソローの説明：“the cost of a thing is the amount of what I call life” (Thoreau [1854], p.19)

束縛され、農民は生産物市場という迂回的経路を介して同じ束縛を受けることになる。例えば、生活と交換される家の値段を800ドル、労賃を1日1ドルとすると、家は10～15年分の生活に相当し、農民にはさらに生産費が重くのしかかる²⁷⁾ (ソロー・飯田 [1995a], p.12, pp.60-62)。

「人間の魂のたいせつさや、今日という日のたいせつさを考えてみると、(中略)私はその年のコンコードのどんな農民よりもよい成績をあげることができた²⁸⁾」(ソロー・飯田 [1995a], p.101) という表現は、自給によって(生活)時間を買戻し、市場を経由しない方法で時間が評価できることを確信したソローの勝利宣言と理解すべきだろう。

2年目には作付面積を「三分の一エーカー²⁹⁾」(ソロー・飯田 [1995a], p.101) に縮小し、自給には1%未満の「二、三ロッド³⁰⁾」(約50～75m²)で足りる(ソロー・飯田 [1995a], pp.101-102) としたソローが荒地を開墾して耕作に拘泥した理由は農民との目線の共有³¹⁾ にあり、マメ畑での並はずれた丹念な「草取り³²⁾」(ソロー・飯田 [1995a], p.288) に取り組む彼の逞しい精神³³⁾ を支えていたのは農民たち³⁴⁾ であつたと考えられる。

とはいえ、貧しさゆえに自然と共存しうる農民³⁵⁾ は、そのために自然を収奪する両義的存在³⁶⁾ であり、「聖なる技術であつた」(ソロー・飯田 [1995a], p.294) 古代ローマの農耕との比較において批判せざるをえなかった同時代の農業に対するソローの思いは複雑である。ソローにしても、崇高な理念や素朴な生活様式とは別次元の日雇労務者、測量技師、鉛筆製造業に収入の道を

27) 「コンコードの農民たちのことを考えてみると、彼らはたいいていの場合、それぞれの農場を名実ともに自分ものにして、二十年、三十年、四十年と汗水流して働いている(そのかせぎの三分の一は家屋の費用に消えてしまうとみてよい)。」(ソロー・飯田 [1995a], p.61)

28) “All things considered, that is, considering the importance of a man’s soul and of to-day … that was doing better than any farmer in Concord did that year.” (Thoreau [1854], p.36)

29) 前年(1845年)の作付け面積(2.5エーカー)の約13%に相当する。

30) 1ロッド(sq rod)は160分の1エーカーである。

31) “look through each other’s eyes” (Thoreau [1854], p.6)の具体的形態。

32) ソローが自らに課した自発的苦行の一つであつたと考えられる。

33) 「弾力性”(resilience)の核心部分にある要素の一つと考えられる。

34) 「私は、こんなふうな、ニューイングランドの農民たちとともに農耕に明け暮れていた」(ソロー・飯田 [1995a], p.288)

35) ソローは、「農夫は貧しければ貧しいほど(中略)私にとっては尊敬すべきもの、興味深いものに思える」(ソロー・飯田 [1995b], p.48) と述べている。

36) “He knows Nature but as a robber.” (Thoreau [1854], p.108)

求めざるをえず、森で暮らし始めた最初の8ヶ月間³⁷⁾の収支決算にも農業収入(8.715^{ドル})を上回る農外収入(13.34^{ドル})が計上されている(ソロー・飯田[1995a], pp.110-111). しかし、彼は測量や鉛粉製造、講演や文筆業等の収入比率を高め³⁸⁾(ハーディング・山口[2005], p.387-389), 「神経質で、騒々しく、こせこせした十九世紀」(ソロー・飯田[1995b], p.286)に身を置きながら、もう一つの世界において“Walden”には書かれていない農業再生の物語を展開していたのではないだろうか³⁹⁾.

3-2 弾力性の喪失と回復

読書だけでは「森羅万象の言葉を忘れてしまう」(ソロー・飯田[1995a], p.201)という恐れは創造性についての再考を迫るものであり⁴⁰⁾、体験抜き的情報入手方法は同じ危険性を持つと考えられる。また、妄想と実体とをはき違える物象化による倒錯的傾向(ソロー・飯田[1995a], p.171)がそれに拍車をかけ、農業の持続可能性が低下していく。

結果的に、森での家作り⁴¹⁾と畑仕事はソローに「瞑想」や「無為」という療法によって弾力性(resilience)の回復をもたらし、彼は歓喜の歌を綴る⁴²⁾。すなわち、「難行苦行に明け暮れ」(ソロー・飯田[1995a], p.16), 「自分自身を奴隷にしている奴隷監督」(ソロー・飯田[1995a], p.16)とは森に行くまでの自らの姿でもありと考えられる。体罰に抗議して教職を辞め、鉛筆工場で働くことで家業を支え、私塾経営で敬愛する兄を亡くしたソローは森に入り、自然にふれる中で常識を踏襲することを放擲し、自らの歩むべき道を見出す⁴³⁾。それは弾力性の回復から説明しうる人生の画期である。ソローは19世紀米

37) 1845年7月4日～'46年3月1日(ソロー・飯田[1995a], pp.107-112)

38) ソローは作業中の事故により肉体労働が困難になった(ハーディング・山口[2005], p.274).

39) 例えば、CSA (community supported agriculture), urban farmer (都市農), 農業体験農園などは農民と市民との協働(農法の革新的継承)という視点からソローの物語を継承するものであると考えられる(コックラル=キング・白井[2014], pp.299, 八木[2008], pp.109-118).

40) 読書を離れた2年間の独居生活に主著作の源泉を持つソロー自身がそれを実証している。

41) “Walden”の“house”には「日常生活拠点」の意味が込められている(伊藤[2017], pp.38-39).

42) 「生活を質的に高める」(ソロー・飯田[1995a], p.162)ことを至高の技“the highest arts”(Thoreau [1854], p.59)とした彼は「夜のトウモロコシ」(ソロー・飯田[1995a], p.202) “corn in the night” (Thoreau [1854], p.73)のように育ち、どんな手仕事よりも良い時間を過ごした。

43) 「隣人たちが善と呼ぶものの大部分を、私はひそかに悪だと信じている」(ソロー・飯田[1995a], p.23). 「善行は自分の体質に合わない、との確信を得た」(ソロー・飯田[1995a], p.130)

国東部という時空間によって制約された生活と結びついた文化を実験的に再編し、自然と共存する能力の回復に努め、アイルランド人の移民夫妻に自らの取り組むべき課題を熱く語った⁴⁴⁾。マメ畑を耕していた時には意識できなかった太陽の恩恵を“Walden”執筆時には明確に意識し、「その光と熱の恩恵を、それにふさわしい信頼と雅量をもって受け入れなくてはならない」(ソロー・飯田 [1995a], p.295)と記載することになる。

4. 『農業論』の多様性

4-1 ソローの『農業論』

家庭菜園程度の経験はあったにせよ、ソローが同時代農業に土地収奪の性格を見出し、批判的見解を主張した背景にはカトー⁴⁵⁾の『農業論』等から得た古代の農耕様式に関する知識⁴⁶⁾があったと考えられる。しかし、その時期を1851年とすれば⁴⁷⁾、マメ畑耕作時には古代の農業収益が「宗教の教え」(ソロー・飯田 [1995a], p.295)に適合し、地球全体を等しく耕す太陽の「光と熱の恩恵を、それにふさわしい信頼と雅量をもって受け入れなくてはならない」(ソロー・飯田 [1995a], pp.294-295)と明確に意識していたとは考え難い⁴⁸⁾。また、「マメ畑の草取りをしていたとき、私はこの光に照らされていなかった」(ソロー・飯田 [1995a], p.23)という記述はそれを物語るものであると考えられる。

44) 「真正のアメリカとは、そんなものなしでも暮らせる生活様式を自由に探求できる国であり、そういう物を使うことによって直接間接に生じる奴隷制度や、戦争や、そのほかの余分な出費などに賛同することを国民に強制したりはしない国なのである」(ソロー・飯田 [1995b], p.66)

45) 古代ローマのカトー (紀元前234～149)は「少年時代を農場で過ごし、(中略)土を掘り、植物を植えて過ごした」(今泉 [2004], p.81)と自著に記している。

46) 「カトーの『農業論』は、私にとって当節の農業雑誌『耕作者』に代わるものである。」(ソロー・飯田 [1995a], p.150)。

47) 今泉の翻訳書には、(1851年)「カトーの『農業論』を読み、人生を豊かにする楽しみは変わらない、と確信した」(今泉 [2004], p.81)という註記がある。

48) ソローが実際に農業技術を学んだのは、「農夫たちは、こういうやり方はいけないと警告していた」(ソロー・飯田 [1995a], p.279)、「農民たちとともに農耕に明け暮れていた」(ソロー・飯田 [1995a], p.288)、「ひとりの賢い農夫が雪を踏みしめてやってくる音が聞こえた」(ソロー・飯田 [1995b], p.175)などと紹介されている地元の農民たちであったと考えられる。

ソローの「マメ畑」は「未開地と耕作地を結ぶ環^{リンク}」(ソロー・飯田 [1995a], p.282) であり、同時代の模範農場とは著しく性格の異なる半耕作地 (half-cultivated field) であった。その実践上に構築されるソローの「農業論」はカトーの『農業論』をベースに、農民との対話から生まれた⁴⁹⁾ 持続性の高い農業論⁵⁰⁾ だったと考えられる。それは、森を去って「仮寓者 (sojourner)⁵¹⁾」(伊藤 [2017], p.37) となつてから、“Walden” が出版される⁵²⁾ 1854年までの間に講演で語られ、原稿の加筆・修正を重ねる中で検討された農業論であり、自然と調和した農業となるはずであったが、19世紀⁵³⁾ の米国では実現されることのない⁵⁴⁾ 幻想的な、だが、かつては実在し、未来においては実現しうる農業システムであった。

4-2 与次右衛門⁵⁵⁾の『農業論』

4-2-1 会津の風土と精神性

漱石の創作活動が20年余の学究生活によって支えられていたように、ソローの源泉は Concord Academy⁵⁶⁾ と Harvard College⁵⁷⁾ に見出せる。その才

49) 1849年1月3日, Concord Lyceumで『森の生活』の「マメ畑」の草稿に基づく「白い豆とウォールデン湖」を講演し, 1849年4月27日にはConcordに隣接するWorcesterで再演を行い, 約百人の聴衆を魅了した(ハーディング・山口[2005], pp.351-356)。

50) 鉄道輸送の進展による市場競争の激化で失われつつあった近郊酪農地帯の有利性を回復するために新作物を導入し, 経営改善と草地開発(自然破壊)の抑制を同時に図り, 隔離圃場でのbeanの原種栽培に着手したと推測される。「私が大規模農場の経営について言えることは(中略)単に種を用意したということだけ」(ソロー・飯田[1995a], pp.147-150)。

51) 「仮寓者 (sojourner)」には, 「ピリグリム(聖書「イザヤ書」の巡礼者, この世では仮の宿りしかもたない旅人)」(伊藤[2017], p.38)の隠喩があると説明されている。

52) “Walden” は1854年8月9日, Tickner & Fiels (Boston) から初版2,000部が小売価格1^{ドル} / 冊(経費43^{セント} / 冊, 印税15%)で刊行された(ハーディング・山口[2005], p.488)。

53) 「神経質で, 騒々しく, こせこせした十九世紀」(ソロー・飯田[1995b], p.286)。

54) 「次の夏がすぎ, さらに次の夏も, 次の夏もむなしく過ぎていった。(中略)私が蒔いた種は, たしかにそうした美徳の種だったかもしれないが, どれも虫に食われ, あるいは生命力を失っていたので, ついに芽を出すことはなかった」(ソロー・飯田[1995a], p.292)。

55) 佐瀬与次右衛門は1630年に幕内村で生まれ, 1711年に死去。この間, '43年に保科正之が藩主となり, 前藩政下の修正検地を'48年, また, '65年には新田開発を含む検地が行われた。'70年に約80石を相続したが, '80年には弟に約19石を分与。『会津農書』上梓(1684年)の2年後に家督を譲り, 1704年には『会津歌農書』をとりまとめた(佐瀬[1982a], p.234)。

56) 1828年秋Concord Academyに入学したソローはP.Allen (1825年Harvard卒)にVergil, Cicero, Caesar, Euripides, Hornerなどを原語で学んだ。(ハーディング・山口[2005], p.33)。

能が恵まれた環境⁵⁸⁾の中で磨かれ、カトー『農業論』に基づく農業批判に結実したと考えられる。

本節では、災害による圧力を跳ね返す弾力性(resilience)を持続性の成立要因の一つとして着目し、江戸時代の農業論を求めて佐瀬与次右衛門⁵⁹⁾の『会津農書』を対象に考察を進めたい。佐瀬は『会津農書』に、「凡農夫八時、所位を勘へ、草木の萌芽、花実を弁へて稼穡を為ハ、能其節に合ひ、五穀も秀て菜蔬も茂り、根、茎共に豊饒にして、年の貢を献し、余慶を以妻子を育ミ、古今黎民の産業を知るを農智と言。且仁心を起し、父母、兄弟に睦しく、朋友の交りを篤し、奴婢^{あわれ}を恤ミ、敢て寒暑の艱難を厭ハす耕耘を務類ハ誠に農家の勇といわん⁶⁰⁾」(佐瀬[1982a], p.5)と記載している。

武士の出自を持つ肝煎役の与次右衛門⁶¹⁾の胸中には、直耕論⁶²⁾「士は不耕してくらい、不造^{つくらず}して用い、不売買^{ばいばいせず}して利たる、その故何事ぞや」(田尻[2011], p.46)とする山鹿素行⁶³⁾への共感が去来したかもしれないが、その基本は「人の一身に五倫備わる。身に主たる者は心なり。このゆえに心敬すれば、即ち一身修まりて五倫明らかなり⁶⁴⁾。(「敬齋箴序」)」(田尻[2011], p.64)とした山崎闇齋⁶⁵⁾にあると考えられる。すなわち、時処位の至善を考えて事に対処するために、五倫に配慮する心を重視する。「儒者の工夫は心身相共に全く養

57) 1833～'37年当時、Harvardは古典を重視。後の総長C.C.FeltonとC.Dunkinが担当したギリシャ語、C.Beck(ドイツから亡命)とH.S.Mckeanが担当したラテン語を各々8学期分取得した。(ハーディング・山口[2005], pp.45-46)

58) 当時のConcordは人口約2,000人、酪農を中心とするBoston近郊の農村だったが、ソローは移住してきたR.W.Emerson, A.B.Alcott(L.M.Alcottの父), N.Hawthorne, W.E.Channingなどの知識人やE.Hosmerなどの地元農民との親交を深めていた。

59) 佐瀬与次右衛門について秋川[2016]を参照。

60) 【拙訳】「時節、地形、土壌の性質を考え、草木の芽生えや花や実の付き方を弁えて作業をすれば、五穀の実りや蔬菜の生育もよく、根も茎も豊饒で、年貢を納めた残りで妻子を養える。今も昔も、それを「農智」と言う。また、「仁」を心に懐き、父母、兄弟仲良く、友情に篤く、使用人にやさしく、寒暑の艱難を厭わずに耕耘に務めることが農家の「勇」である。」

61) 佐瀬家の先祖は「佐原十郎義連の家臣」仁科太郎光盛とされる(長谷川[1968], p.17)。

62) 安藤昌益の直耕直織思想は中国古代の農本主義思想との、また、自然と人間の調和に関する思想は中国古代の天人関係論との関連性が指摘されている。(農文協[1993], p.35)

63) 山鹿素行は会津に生まれ(1622年)、江戸で儒学や兵学を修めた後、播州赤穂藩に仕えた。1665年、『聖教要録』を刊行し、流論(浅野家預かり)となる。1685年、逝去(享年64歳)。

64) 「自分が崇拜する神に捧げた肉体という神殿を、純粹に自己流の様式で建てる建築師」(ソロー・飯田[1995b], p.94)というソローの人間観との時空を超えた符合が感じられる。

65) 山崎闇齋は京都の鍼医の家に生まれた(1618年)。保科正之(1611-72)の顧問。「敬」を軸とする朱子学を展開。正之没後の50代後半から著作に専念し、1682年、逝去(享年65歳)。

い持て、日用人事を外にせざることを旨とせり。この心有れば、此の身の動有り、身の動有りと、即ち事なり。此の三のものは須臾も不相離しゅゆ あいはなれず、処に付て有もの也(「敬齋箴講義」)(田尻 [2011], p.65)。『農書』から『歌農書』に至る与次右衛門の農業論は、人間関係を中心に展開される闇齋の思想を「農業」を介して体感する「人と天地自然」(人⇄農⇄生態系)の関係を拡張したものであると考えられる⁶⁶⁾。

4-2-2 自然との共生

シベリアから飛来する渡り鳥に餌場やねぐらを提供するために宮城県蕪栗沼・周辺水田(2005年ラムサール条約登録)で冬期湛水が始まった頃、地元の参加農家はそれが江戸時代にも行われていたことを知らなかった⁶⁷⁾。幕内は、度々、洪水被害に遭ったが、17世紀後半以降、河川改修や築堤等の治水事業により洪水被害が著しく減少し、その代償として水田の地力再生に係る自然の役割が後退し、新田開発も含めて非作付期間の地力維持・再生手段が求められる状況にあった。その方法の一つが用水中の有機物(微生物を含む)を施用し、熟田化を促進させる「田冬水」であったと考えられる。(佐瀬 [1982a], p.477)。

『会津歌農書』上之末

(八五)田冬水 附春水

あら田にも冬水かけよ土はやく くさり本田の性と成へき⁶⁸⁾

(佐瀬 [1982b], p.109)

幕内に隣接する中荒井組の耕土層には砂質土が多いことが寛文五年(1665年)の検地の際に行われた土壤調査の結果を記載した『会津風土記』(寛文六

66) 江戸時代の農民は財政基盤となる年貢米生産および公共事業の労力負担(賦役)をしていたことから、地域社会の持続性に大きく関与していたと考えられる。また、化石燃料に依存しない農業技術は気象条件や土壌などの自然的要因の影響をより一層強く受けたと考えられる。

67) 冬期湛水地域は、近世以降、伊勢・尾張地方以北の冬期寒冷・多雨地域に広く分布したが、近世中期以降、多肥・乾田化により衰退したと説明されている(山田 [1956], pp.99-100)。

68) 『会津農書』段階における「田冬水」(冬期湛水)の主目的は、新田開発(面的拡大および質的多様化)の補完策として、非作付期間中の用水(液肥)に含まれる有機物(≡微生物等)施用によって早期熟田化(質的向上)を図り、米増産を目指すことにあると考えられる。

年)に示されている。また、正徳五年(1715年)の作毛巡見の際には、幕内村を含む近隣五ヶ村の肝煎たちが連名で稲作(晩稲)不適地である旨を郡奉行に申し立てる程であった⁶⁹⁾。(佐瀬[1982b], p.404-405)。



写真1 『会津農書』写本(福島県歴史資料館収蔵⁷⁰⁾)

佐瀬与次右衛門が自らの経験と観察結果をふまえ、『会津農書』を書き綴ったのはその転換期にあたる。年次変動を繰り返す自然条件の下で、経験と観察をふまえながら農業に求められる技術や智恵を生み出していく過程がそこに展開されているのである。

圃場における生き物たちとの共生という点に関して附言すれば、『会津歌農書』には、現代の合鴨水稲同時作農法⁷¹⁾を彷彿させる「鳥耘」を副題にした歌が詠まれている⁷²⁾。

「『会津歌農書』下之本

(四八)^{しょう}象耕 附鳥耘

耕耘を鳥やけものゝ助るハ まことに天の恵ミなるらん」

(佐瀬[1982b], p.260)

69) 庄司[1956], pp.103-104, 萩川[2016], pp.28-32も参照のこと。

70) 寛延元年(1748年), 佐々木和右衛門氏の筆写による通称「佐々木本」。

71) 合鴨水稲同時作は豊かな弾力性を持つ発展途上の農法である(萩川[1998], pp.75-76)。

72) 江戸時代の冬期湛水田は渡り鳥たちの餌場や^{すま}として利用されていたと考えられる。

厳寒期の過酷な流水客土作業によって地力維持を図る田冬水には、家族・村落共同体の絆を醸成する効果も期待されていたのではないかと考えられる。また、封建制下における高齢者福祉を効率的に維持するための規範意識の醸成方法として「孝」の役割が示唆されているが⁷³⁾ (石川・田中 [2002], pp.283-290), 『会津歌農書』は「農家五倫」として、「孝」について以下のように記載されている。

『会津歌農書』下之末

(一二) 農家五倫子孝⁷⁴⁾

いとゝたにあゆみ叶はぬ親の身の 不作と聞かば猶なけくべき
 不作すとよろしとかたりなくさめよ それも当座の親の悦び
 耕しを親にかくるな穂末田の 夏のあつきに草きりは猶
 よしあしも親の心に打任せ そむかぬこそハ深き孝行」

(佐瀬 [1982b], p.310)

「天の道を用い、地の利に因りて⁷⁵⁾ 人の事を尽くす」(佐瀬 [1982a], p.359-360) 倫理観を勧めた与次右衛門にとって、老親を慮ることは、天地自然の運行に合わせて作物の面倒を見ることと同様に、人としてなすべき日々の務めの一つであったと考えられる。

4-2-3 気象への対応

次に、『会津農書附録』に記載された春の遅霜について着目したい。元禄八

73) 「親孝行とは、ごくわずかのエネルギー消費で運営せざるを得ない社会での、もっとも間接経費のかからない老人向けの社会保障制度だった」(石川・田中 [2002], p.284)

74) 江戸と家康の関係と同様に、保科正之は神格化されて「土津霊神」として祀られ、会津盆地を鎮護していると考えられていた(田尻 [2011], p.26)。当時の会津地方の村社会において儒教の根幹をなす五倫(人として守るべき五つの道)が重視されていたのは当然であろう。

75) 『会津農書』では最上位の土壌が「黄真土」とされ、「其味甘く、其性重く、能万物を生し」とされている(佐瀬 [1982a], p.18)。「真土」は石灰岩や火山岩等が浸食・風化作用を経て流水によって運ばれた堆積土壌であり、土壌中の有機物、ミネラル、土壌微生物等の含有量による相違があると考えられる。水田は9種類に分類されているが、「常に水瀝く故に、水と泥等し」(佐瀬 [1982a], p.19)と記された卑泥田は湿地帯を水田地帯に転換してきた会津人にとって原型的農地であると推測される。さらに、卑泥田は生産力の直接的規定要因ではなく、その収量は土の上下と農民の努力や創意工夫(稲作技術)次第で変動するとされている。

年(1695年), 四月十日(5月22日⁷⁶⁾)～四月十六日(5月28日)に3度の降霜。だが, 被害はなかった。同年, 蠅は田植期に見られず, 七月中旬(8月下旬)に漸く出始め, 「草木の花常に十日余も遅く咲ク」, 「田方ハ大不作」であった⁷⁷⁾。前年末の積雪は例年より多く⁷⁸⁾, 元禄八年春は頻繁に雪が降り⁷⁹⁾, 彼岸明けまで残雪があった⁸⁰⁾。要するに, 元禄七年冬～八年春の状況は花芽形成時期を早めるものではなかったと考えられる。それに対し, 翌元禄九年(1696年)は「旧冬より雪一切ふらす。翌春百十二日めに, 瓜中葉二葉宛出候時大霜降皆枯す。我ハ皆ふたをして一本も霜_二不逢。或人, 日頃酒をすき飲申候。此節酒に酔, 其身暖にして風の寒を忘れて, 霜ハ降間敷とて我大勢ふたするを見て笑氣に致候。然るに翌朝大霜けしからすふり, 土しみ上り, 瓜ハ不殘枯死役立すしておい蒔す」と具体例が示され, 厩肥や稲藁等で霜除けの「ふた」をすべきと『幕内農業記』に記されている(佐瀬 [1982b], pp.378-379)。

「用_二天の道_一, 因_二地の利に_一, 人の事を尽ハ, 天地の化育を賛るの類成へし。是を守て失ハす, 其上に禍を除き, 福を受ん事を神明に禱らハ, 自然の感応ありて必作徳を得へし。此理を不知して徒に勤る者は, 仮令成熟を得る人有共, 幸にして不作の難を免れたる成へし⁸¹⁾」(佐瀬 [1982a], p.359)とある。天地自然の摂理を知り, それに従い人事を尽くし, その上で神明に禱(いの)れば必ず作徳を得る。2016年の凍霜害の主原因は前年の暖冬と直前の気温上昇(図1, 2)にあると考えられるが, 被害を抑制できた農家もある。その「作徳」に関して, 『歌農書』は「諺」盲信の危険性と記録の重要性を教えている。

『会津農書』下之末

76) 括弧()内は現在の暦(グレゴリオ暦)の日付を示す。

77) (元禄八年)「四月十日の朝霜降ル, 百七日に当ル。作毛にハあわす。同十四日に深山へ雪降ル。同十五, 十六に霜ふる。作にハあわす」, 「田植に蠅一つも不出。六月節に成て七, 八日比る少出ル」(佐瀬 [1982a], p.307)。

78) 「十二月朔日(1/15)迄ハ雪浅く田の畔頭ル。同二日(1/16)の晩より大雪ふる, 累年の冬ハ大雪也。」(佐瀬 [1982a], pp.302-305)。

79) 「二月の内ハ(雨)八度降, 雪度々ふり風吹」(佐瀬 [1982a], p.307)。

80) 「居平の雪二月彼岸の終に消ル」(佐瀬 [1982a], p.306)。

81) 【拙訳】気象の変化に従い, 土壌の性質を知り, 人事を尽くせば自然な生長を助けることができる。その道理を守り, 禍を避け幸を承ることを神に祈ることで自然に心が動き(洞察力か), 必然的に徳が得られる。その道理を弁えずに働く者の実りは偶然の産物にすぎない。

82) <http://www.data.jma.go.jp/ged/risk/obsdl/index.php> を2016年10月11日に閲覧。

(四) 農人諺^{ことわざ}

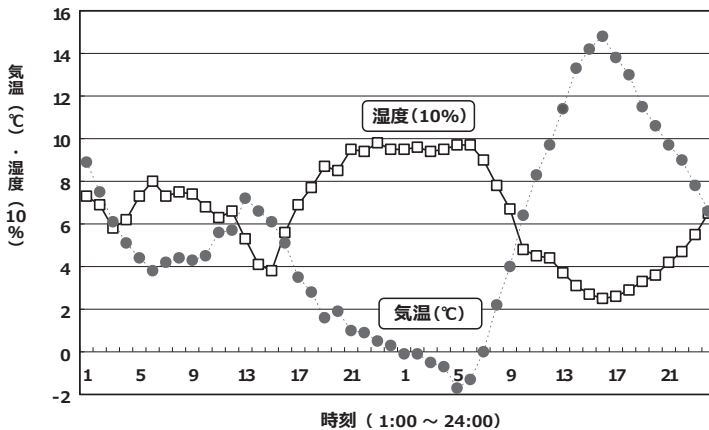
諺の豊凶こゝろミ留をくは 後の為なり記しつゝけよ
 ことわざの年の豊凶ハさだかなし 事実時変の有に付てハ
 よきを用ひあしきハ捨て諺の あらゆるほとや書記せかし]

(佐瀬 [1982b], p.302)

平成28年(2016年)4月12日、会津地方を寒波が襲い、柿農家に大きな被害を与えた。6月28日付河北新報は「例年の2割程度しか収穫を見込めない農家が多い」という減収予測を報じ、その原因を4月12日の降霜と暖冬とした上で、「例年より約1週間早く出た新芽が凍り、枯死してしまった」と解説し、「春の霜は前例がない。分かっていればストーブをたくとか、薬を使うとか防ぐ方法があった」という農家の声を伝えた(河北新報[2016])。

気象庁のデータによれば、同日の会津若松では氷点下の気温が午前1～7時まで6時間続き、午前5時に最低気温(-1.7℃)を記録した。暖冬で早期化した花芽形成が4月9、10日の気温(最高気温は各々23.1℃(平年比+8.3℃)、21.1℃(同+6.0℃))によって一気に進んだと考えられる。そこに安全神話や油断はなかったのだろうか。

図1 会津若松市における気温・湿度の変化 2016年4月12日

出典：気象庁「気象データ⁸²⁾」

『会津農書附録』は「五穀、蔬菜は耕しの作なれハ(中略)花咲き当たるハ農

夫の術に成べし⁸³⁾という問いに対し、「花咲ハ其時を得て一同なれハ人力に不_レ叶」と答えている（佐瀬 [1982a], p.439-440）。開花期が積算温度や日長の影響を受け、栽培法では制御できないことを経験的に認識していた与次右衛門であれば、あるいは暖冬に異変の予兆を感じ、何らかの対策を講じていたかもしれない。

『会津歌農書』下之本

(一) 農家油断

油断して万の苗に蓋をせず 百五の霜にあはせぬるかな

(三) 危農務^{あやうきのうむ}

よもや早百五の霜はふるまじと 天をはかるは危ぞかし

(四) 愚農夫

天をいのり地福の神にちかひても をろかの人の作ハミのらじ

(佐瀬 [1982b], p.222-223)

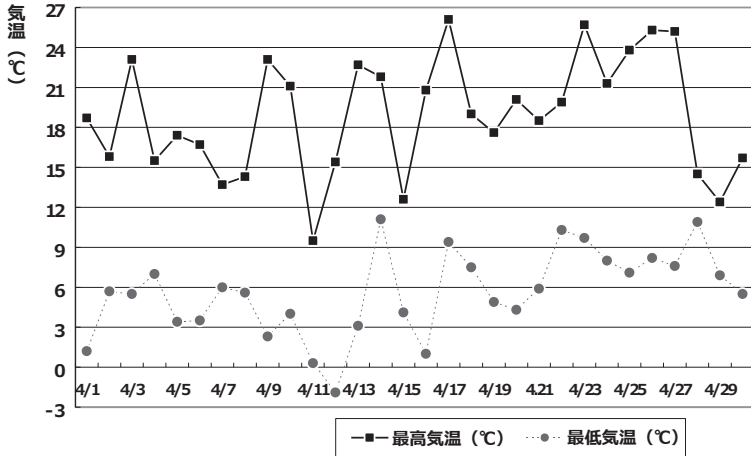
儒教の教えに従うことの大切さを説く与次右衛門は、気象の変化に気付かず、行うべき農作業を怠り、天地自然の神に祈るだけの農民に対して収穫を得ることのできない「愚農」と断じる。そこには自然を顧みない農民を「盗賊」と戒めるソローあるいは芸術家や運動選手に通じるような厳しさが感じられる。山崎闇齋をブレインとする保科正之が治める会津藩において、「天に祈り、神に誓うだけでは「作徳」は得られない」ことを農民に教え伝えるには相応の知恵や技術水準の他に厳しさが求められたと考えられる。

それと同時に、「収穫時に苦しさを忘れてもよいが、農作業を怠けてはならない」、「夏の空腹を思い出し、実りの秋にも節度を忘れるな」、「無理だと決めつけず、やれば何でもできる」、「農事暦を念頭に、作業適期を忘れるな」、「知らないことは聞きなさい、知ったかぶりは見苦しい」と、藩と農民を取り結ぶ肝煎らしい人情味溢れる倫理観が感じとれる。

83) 【拙訳】(果樹では無理だとしても)「作物の開花期は栽培技術で変えられるのではないか」

84) <http://www.data.jma.go.jp/ged/risk/obsdl/index.php> を2016年10月11日に閲覧。

図2 会津若松市における気温変化 2016年4月1日～30日

出典：気象庁「気象データ⁸⁴⁾」

『会津歌農書』下之末

(五) 農人覚悟

くるし^{とも}も実りし時ハわするへし 只おこたるな農のはたらき
 乏しくて過こした夏をおもひ出し⁸⁵⁾ みのれる秋に心ゆるすな
 農業のならぬといふもふかくごよ 勤て見るに叶ハぬハなし
 ゆるかせニ心ヲ持ツ農の わざニハ時セツノアルコトソカシ
 農の道しらずハ人に聞かよし かしこきふりは見るもはづかし」

(佐瀬 [1982b], pp.302-304)

85) ここでの「乏しさ」は夏場の食料不足を詠んだものと考えられるが、その空腹と暑さの中で行われる除草作業などが苦しさを一層かき立てたと考えられる。「(二一) 畠秀取 附行」 「氷雨や日であり成とも畑の草 取すにならバ油断ばしすな」(佐瀬 [1982b], p.182)



写真2 会津地方の農村風景⁸⁶⁾

「天の道を用いる」とは農事暦に従って農作業を行い、経過と結果を観察し、記録することで自然を味方につける⁸⁷⁾作業体系を構築することである。しかし、与次右衛門は「ことわざの年の豊凶ハさだかなし」と詠み、冷夏や暖冬、長雨や早魃等の異常気象に対する注意を喚起している⁸⁸⁾。自然相手の農業において、気象の不規則変動は地球温暖化が叫ばれる現代に特有の現象ではなく、『会津農書附録』にも記載された普遍的な事象である⁸⁹⁾。問われるのはステレオタイプな紋切型の予測ができない不規則変化に対する対応力⁹⁰⁾である。『会津農書』において、「気象変動」という多様性は「田地位」に示される土壌の多様性(豊かさ)と同様、「地の利」=恩恵と認識されている。不規則な変動を繰り返す気象の多様性(豊かさ)を活用した「天地人」の農業⁹¹⁾を実践することによって、<試行⇒経験⇒観察⇒記録⇒>という過程を螺旋階段状に循環・上昇して行

86) 1960年代、扇状地の湧水地帯に位置する川では子供たちが水遊びに興じ、大小の石と砂利の河原が広がっていた。この風景は山林の荒廃と河川の富栄養化の現状を物語っている。

87) 「四時の気候、時令を能勘へて農業を務るといへる事成へし」(佐瀬[1684], pp.359-360)

88) 「嘗て天の道に常例あれ共、暫く不正の気ありて春の日布而寒き事あり、夏の日布て冷か成事あり、秋冬も又如此なり」(佐瀬[1684], pp.359-360)

89) 「『会津農書附録』には1691年(元禄4年)～1709年(宝永6年)の気象等が記録され、幕内村では冷害、干魃、水害などが繰り返されていたことがわかる」(桜川[2016], p.19)。

90) 本稿では、それを「弾力性」(resilience)という概念で補足しようとしている。

91) 天・地に支えられて生きる人が三者の統合を図る営みを「農」とする(桜川[2016], p.33)。

くことができ、農民の知恵(智)、人間性(仁)、勇気(勇)という能力(農力⁹²⁾)
が向上して行くと考えられる⁹³⁾。

4-2-4 『会津農書』と『会津歌農書』の栽培学

次に、樹木について考えてみたい。「屋敷内樹木」には「栗、柿、胡桃、梨子、
林檎等、菓の生る木を植へし。第一用て宜ハ^{シノノカキ}榊柿、扱木の枝ふり拵様有。小
き時に幹を留、或は枝を斜、^{ユガメ}四方へ蔓る様にすへし。編名^(実)⁹⁴⁾、大豆も葉懸テ、
あミ物の類懸るにもよし」とされ、「内山樹木」として、「山の根にハ、竹、榎、
蜀椒、柿、栗の類植へし(中略)年の菓を取て当座の益となすへし」(佐瀬
[1982a], p.191)と記されている。

与次右衛門は敷地や裏山に(飢饉時に命をつなぐ)柿の木を植えなさい、
と勧めている。渋柿の「榊柿」(信濃柿)を勧め、保存食(カテ)の編菜や大豆
を干すにも柿木は好都合であるとしている。柿の凍霜害対策は複数技術の組
合せからなる。2016年の柿産地(門田地区)で被害程度を分けたのは、花芽の
枯死率に係る樹園地の「地力⁹⁵⁾」と、それらの花芽を生長させ結実させた
剪定法と考えられる。『会津歌農書』では、施肥と土壌の相性を試して、施肥
管理に関する勘と経験を養い、土壌に合う適切な肥料を選んで適量を施肥す
ることが詠まれているが、これは土壌診断・分析による施肥設計という現代
の科学的農法⁹⁶⁾に通じる。

92) 天地自然に感応する心と、技に関する知識・経験を統合する身体的能力。心技体の一致。

93) 単純に原因と結果を比較して短期的収支を計測すれば、明らかに災害は農民に恩恵ではなく損
失を与える。しかし、長期的に見た場合、冷害や早魃害によるストレスが持続性に関与する弾力
性(resilience)を上昇させる可能性は否定できない(降雪量と会津人の特性は傍証の一つであろ
う)。かかる意味において、多様性は農民にとって恩恵であったと考えられる。

94) 編菜は「大根葉や蕪葉を縄で編んで干し、冬期間の食料にする」(佐々木[2015], p.98)

95) 地力の高い(豊かな)土壌で生育する柿木は栄養生長期間が長く、気象変動に対する対応力(弾
力性)が大きい。被害程度が軽微であった農家の花芽は、4月12日の低温(-4℃)でも枯死しない(堅
固な外皮で被覆された)状態の花芽が多かった。

96) 例えば、BLOF (Bio Logical Farming) (小祝[2005], pp.152-215)は土壌分析と有機物施用によっ
て天地自然の力を合理的に活用する実験・実証型の『会津農書』農法を農学や分子生物学などに
おける研究成果をふまえて継承する21世紀の農業理論=技術の一つである。Japan Bio Farm (<http://www.japanbiofarm.com>)。

『会津歌農書』上之末

(二七) こやしやしなひ 田映養行

あまたある腴の性の田の土に あふときかぬをためしやしなへ
田の土の性をよくわけこえハ先 過不足もなく中にやしなへ」

(佐瀬 [1982b], pp.79-80)

新畑でササゲを栽培すれば良い収穫が得られると詠んでいるが、「あら畑」(開墾畑)の初作にササゲ(bean)を勧める与次右衛門と、荒地を開墾した畑にインゲン豆(bean)を播いたソローとが時空を超えた奇妙な一致を見せている。その理由は不明だが、興味深い。なお、2016年はFAO「国際マメ年」(international year of pulses)であり、栽培しやすく、栄養価が高い作物としてマメが推奨された。いかに博識なソローであろうと、その事実を知っていたとは考え難いが、興味深い点である。

『会津歌農書』中之本

(一三) おこす 新畑発行

(新) あら畑をおこしはじめに先ささげ 作れハみのり能とこそいへ⁹⁷⁾」(傍点は引用者)

(佐瀬 [1982b], p.121)

種蒔きにも鳥が関係している。大豆の播き時と郭公の鳴き始めが時期的に一致することは分かりやすい道理であるが、畑に飛来した鳥の鳴き声を「上かけ肥料⁹⁸⁾」(topdressing)に使うという点はソロー一流のジョークであろう。作物の播き時を他の植物の開花期を目安にするという知恵は、気温・地温の積算温度からみて有効な方法であったに違いない。

97) 開墾畑とマメ(bean)をキーワードとして、国際マメ年(<http://www.fao.org/pulses-2016/en/>)の2016年に発見された日米の時空を超えた奇妙な一致。「トウキミ」間作とされる会津藩幕内村のインゲン豆作(佐々木[1992], p.124)により、「コールマン氏の報告書にはのっていないタイプ」(飯田[1995a], p.282)の栽培法の謎が解けるかもしれない。

98) 通常、農学分野では“topdressing”に「追肥」という用語を当てている。

『会津歌農書』中之末

(一) 雑穀蒔時

年毎や大豆まき鳥はやさしくも 蒔すを人に来ておしへける⁹⁹⁾

(二) 准二草木花一雑穀蒔時

さ、げ種子蒔すハ一重山ぶきの 花の開る比ぞとをしれ
かきつばた花のひらかば^(大豆)まめをまく 時節来ると心得よかし
早大豆の種子まきすハ庭に咲 ほたんの花ぞしるべなりける^(薄)

(佐瀬 [1982b], pp.166-169)

与次右衛門は、「地の利に定りたる位あれとも、其土躰、其性によって用へき物あり、用へからざる物有、是を能知へし。特に土ハ中央に位す¹⁰⁰⁾」とし、無数の生命を養う「土」に個性の豊かさを認め、それを活用することが人の務めであるとしている。その文脈から合理化・効率化という価値規範は再考されるかもしれない。すなわち、「活力節約」の手段としての農業機械、それを推進する基盤整理、農薬や化学肥料と引き替えに失われた「土」と「農地」の多様性、「土」の平板化、無個性化、画一化。それはまさしく人間自身の姿であろう。他の生物種が生きにくい時空間に農業では暮らせない住民が増え、グローバル化する市場経済の下で「農」の崩壊が顕在化しつつある現在、農の原型である個性を活かすために自然に学び、「天の道を知り、地の利を知り、人の事を知りて、(中略)上下の神祇に仰願ふ¹⁰¹⁾」理念と方法を伝える『会津農書』の精神を継承すべきである。

では、現代の「農」とはいかなる存在であり、いかに持続可能な社会に寄与できるのか。江戸時代の農業や生活は「自然循環」が基本である。廃棄物を土づくりの素材として用い、循環のサイクルから漏れ出る量を制御し、物質循環の持続性を支えた。その視点から『歌農書』中の「畑作^{こへやしなふてだて}腴養行」¹⁰¹⁾、「腴取始末」を紹介したい。

99) この鳥は郭公。“Walden”には畑に飛来して白樺の梢にとまった茶色鶉擬 (brown thrasher) の囀りが「安あがりの上かけ肥料」(ソロー・飯田 [1995a], p.147) と記載されている。

100) 【拙訳】土地や圃場(土壌)の違いを理解し、何を選ぶべきかを考えることが大切である。五行(木火土金水)の中心に「土」がある。

101) 「畑の産物に対するいっさいの請求権を棄てて、最初の実りだけではなく最後の実りも、心のなかで神々への生贄として捧げようとする」(ソロー・飯田 [1995a], p.296)。

微生物の力を借りて排泄物を発酵させ、それらを田畑の土壤に還元することによって「世の助け」になる¹⁰²⁾。その作業中に手足が汚れることもあるだろうが、手足の汚だけなら洗えばすぐに落とせる。だが、心の汚れは簡単に拭い去ることができない。

「『会津歌農書』中之末

(二二) 畑作腴こへやしなふてだて 養行

其腴を養ひぬれば耕作へ うるほひて世の助けとぞなる

(二三) 腴取始末

始末する腴に手足けがすとも (汚) 心やいかにきよくもてかし

手やあしも洗ひて糞は落ぬれど すゝぐにならぬけがれ心ぞ」

(佐瀬 [1982b], p.185)

4-2-5 『会津農書』の継承

経験と努力を重ね、自ら工夫して技術の習熟を図ることを強調する¹⁰³⁾ ((佐瀬 [1982a], p.5) 『会津農書』は、化学合成物質に依存する現代農業が環境負荷を生み出す構造を変革し、持続可能性を高めていく過程において示唆的な知見を提供している。また、「理論体系から倫理を葬り去ることによって成立した」(岩井, p.361) 経済学に倫理観などの制御機能を組み込む過程においても示唆的であると考えられる¹⁰⁴⁾。さらに、与次右衛門の人間性に則して敷衍すれば、肝煎としての才覚が集落の枠組みをこえて発揮された要因は、儒教思想を精神的支柱とする安定的な藩体制下、肝煎の家系に生まれ、農業や漢籍に精通し¹⁰⁵⁾、その能力を集落の運営、農業生産、租税(年貢・賦役等)交渉や土地紛争に関して発揮し、村人からの信頼が厚かった点にあると考えられる。

102) 「短期的合理性に目をくらまされたわれわれは、千年もかけて作り上げた見事な植物資源の循環システムをせっせと破壊しながら、一方では長期的合理性を無視した工業化のツケである膨大なごみの山を前にして悪戦苦闘している」(石川 [1997], p.85)

103) 「唯他人の開作に准じ、己か心に収斂せずして耕種たるが故に成熟の期にあたらざる事多し」(佐瀬 [1982a], p.5)

104) 『会津農書』は、会津地方における伝統的倫理観と文化的風土の基盤上に成立し、それらを集約的に表現するデータベースであるといえる。

105) 与次右衛門が観察、経験および記録によって植物の開化に関する日長反応や積算温度の影響を認識していた可能性が指摘されている(佐々木 [2008], pp.) (佐々木 [2009], pp.)

『会津農書』に関する学際的共同研究への参加以来、会津農業の民俗学的研究を40年近く牽引してきた佐々木は『会津農書』を、①農民の生活向上、②天災(冷害、霜害、旱魃、長雨等)による凶作の回避、③自然条件と作物(イネ)生育との関係の観察、検証、記録、④立地、土壌、圃場条件の分類、⑤それらと多様な稲品種との組み合わせ、⑥以上を総合する自然に即した安定的高収量農法¹⁰⁶⁾などの観点から整理し、それを実証的に記載している点に『会津農書』の特徴があるとしている¹⁰⁷⁾(佐々木[2009], pp.22-43)。

かかる『会津農書』農法論をふまえて読み直してみると、「作人の手入善悪」が収量を規定するという記述¹⁰⁸⁾などは、「田地位」や「稲の品種」等において示された土壌分級や品種選択との関係が記載された内容と矛盾するように見えるが、その点に『会津農書』の核心部分が存在すると考えられる。すなわち、天の道を用い、地の利に因りて、人の事を尽くすという三者の関係である。三者は補完し合って成立する相互連関性を共有しているのであって、例えば、「田地位」の優劣は「人の事」と切り離して成立しえない。「天の道」、「地の利」との関係においても同様のことがいえる。例えば、「田畠の諸作天地雨露の恵を得て生長すること当然なれと、又農民培養の力をからされハ実ことをゑす。是三方並ひ育るゝ所顕然ならずや」(佐瀬[1982b], p.8)であり、そこに人が人として生きる意味合い、生き甲斐または無限の可能性が秘められているのである。

「用_二天の道_一、因_二地の利に_一、且人の事を尽ハ、天地の化育を賛るの類成へし」((佐瀬[1982a], p.359)。時の流れとともに変化する天地人の多様性に豊かさを感じ、それらを受け入れ、一方に流されぬように心懸ける。『会津農書』農法とは、天災から農作物を守る戦いの末に与次右衛門が到達した精神世界、すなわち、「智仁勇」という能力を養う過程で得られた幸福感を後の世代に伝えようとした農的生き方そのものではないだろうか。

106) 立地(山郷・里郷)、土壌(9種類)、圃場(8種類)の相違を活かした稲作の安定的増収を目的とする自然循環型農法であり、多様な土壌・圃場条件を多様な稲品種(早稲13品種、中手早稲4品種、中稲2品種、晩稲11品種、糯稲5品種の計35品種)と組み合わせた弾力性(resilience)の高い栽培技術体系であると考えられる。

107) 民俗学者である佐々木の研究対象は稲作、畑作、工芸作、農具、民具、農村生活、農耕儀礼など広範囲に及ぶが、ここでは敢えて稲作に限定して紹介させていただくことにした。

108) 「右の歩刈初め積りハ山田、里田共に位にハよらず。作人の手入善悪を以て出来の考、又沓穂の初数多く有ハもて稲草、もてざる稲草も有」(佐瀬[1982a], p.72)

本稿では十分に整理しえなかったが、それが持続性を支える要因の一つである弾力性(resilience)に富むものであることは疑いようのないところであると考えられる。

4-2-6 (補論) 会津の精神的風土

食料以上に低いエネルギー自給率であるにもかかわらず、外交、安全保障、貿易、交通インフラ等の体系的整備によって危機意識を抱くことなく暮らせる状態が維持されている。それ自体は幸福なことでは違いないが、それを支える仕組みやそれと対をなす世界の状況を認識し、配慮すべきである。

『会津歌農書』下之末

(一一) 薪採時節^{たきぎとる}

夏秋に取をくれなば冬の内^(遅) 薪ともしくくるしかるべし^(乏) ^(昔)

(一二) 農家五倫子^{のうかごりんしかう} 孝¹⁰⁹⁾

いやしきと誰がいふとも農業ハ 庶人^{しよじん}の尽す孝の本なり

耕農^{かた}の難^(仕業)きしわさは我つとめ 易^{やす}きを親にかけて置へし

かくれ居てゆかしからめと田や畑も親の穂末を急くやさしさ

(佐瀬 [1982b], pp.309-310)

「禍福は糾える縄の如し」。時を経る間に立場が逆転することは世の常であり、それを弁えれば、農を整えるには家庭円満が第一という考え方は意味深長である。つまるところ、心構えの基本は相手が人でも天地自然でも同じであるということなのだろう。

『会津歌農書』下之末

(一五) 主恤^{しうしゆつ}

主人めき高ぶりなせそ農人ハ 時の貧福頓てかハれば^(ぞ) ^{ひん} ^{やか}

109) 「五倫」は、父子・君臣・夫婦・兄弟・朋友という五つの人間関係で、儒教は伝統的にこれによって、個我ではない社会的な存在としての人間をイメージする。關齋はそれを「人の一身に五倫備わる」と端的に言った(田尻 [2011], p.65)

(一七) 夫和

(心) こゝろばせ先やはらかに其家の 内おさまれば農もとゝのふ

(二〇) 交^{かう}友^{ゆう}信^{しん}

まじはりて信の心うしなハば したしき友も後に疎^{うと}まん」

(佐瀬 [1982b], pp.313-317)

かかる心の豊かさが教えられる一方、俗世間に染まる若者たちの姿が垣間見える。城下に近い近郊農村地帯に位置する幕内は、菜園場として定期市に野菜等を出荷するなど町方との交流も盛んであり、若者にとって誘惑の少ない地域でもあったのだろう。

『会津歌農書』下之末

(六) 田家 慎

慎^{でん}よ小^かうたさミせん楽好^しミ 夜^(博 奕)る長はなしことにはばくゑき

つゝしめよ酒屋^(通 入)ばいりに酔ほれて 家業わするゝ己かこゝろを」

(佐瀬 [1982b], pp.304)

その若者がわが子であった場合、いかなる心構えが求められるのだろうか。肝煎であった与次右衛門は『会津歌農書』の中でそこに切り込でいく。

『会津歌農書』下之末

(一三) 父慈

どの子にも親疎^{しんそ}ふくまず農の道^(教) をしふるこそハ父の慈悲なれ

物ごとにてたつく子をもいつくしみ たゝやハラけよ作の為なり

農の道まがる子ならばとく直せ^疾 父の慈^{めぐみ}と是をいふべし

いつくしむ心のなくて子をしかる 父の短氣^{たんき}ハ捨^{すつ}ものぞかし」

(佐瀬 [1982b], pp.311-312)

「慈しむ」とは「ならぬ堪忍、するが堪忍」の異なる表現であろうか。動物的本性を秘めた人間であるからこそ、人としての道を教え、自然に感謝し、神に祈る「さなぶり」や「祭り」が大切にされるべきであるということだろうか。

『会津歌農書』下之末

(五〇) 田家遊日

をのが田を植て究し明る日に 遊ぶは小さなぶりといふ也
一村の大きなぶりの祝ひこそ 田子のたのしむ遊日の元

(五二) 耕作祭

まづ神へ早稲の穂がけを供ずるハ 作り実るの秋祭なり

(五三) 祈農

神垣かきに心の(注連)しめをかけてこの 祈りは作り実る為なり」

(佐瀬 [1982b], pp.333-335)

冷蔵庫やクーラーはおろか、除草剤も動力機もない農民にとって夏は厳しい季節である。ただでさえ厳しいその季節に早魃が追い打ちをかける。作物の生育に不可欠な水の確保のためにすべきことの全てをし尽くした後は、もはや神に祈るしかなかったのだろう。

『会津歌農書』下之本

(七二) 霽齋祈ながあめのほれいのる

早魃の日数積りて土かハキ 作にさハラバ雨請をせよ

早魃に雨請するハ古への 祈雨の祭りの例しならずや」

(佐瀬 [1982b], p.272)

経験と観察によって先人たちの知恵(伝承)を検証し、それを記録して農法にまとめ、誰にでも実践できる環境を調えるために、1,600首余りの歌を通して村人たちの心に分け入り、人と自然と作物が織りなす壮大なドラマの末に到達したエンディングを喜ぶ歌に、おそらく誰もが共感を覚えたことだろう。

『会津歌農書』上之末

(五二) 蟬

秋の田の初穂のミのり(符 顔)まちがほに 日数重ねるせミのこゑ哉

(五五) 秋田

秋の田のほなミをわたる風までも ゆたかなる世のこゑに吹く哉
(六三) 稲刈

己が世の秋まちつけていつかはや 田面のをしね刈ぞうれしき
(佐瀬 [1982b], pp.95-100)

いま、ようやく待ち続けてきた収穫の季節が訪れた。吹き渡る風は豊かさを祝うかのような、と収穫を喜ぶ人の心はいつの世でも同じだろう。自然と共存する社会を支える農業、そのような農業は、天の道を知ること地地利を活かし、人の心を育て生かす営みであるに違いない。『会津農書』は変化しつつ循環する多様な天地自然と、それを生きる術として取り込む知恵を持つ人間とが「農」という生命世界に調和を生み出す営みを追求している。「農」は幾世代も続くことによって先人を敬い後生を案じる心を育むことになるだろう。会津の地には、今も色濃くその精神的風土が受け継がれている。だが、現実の世界は言葉のみで簡単に説明できるものではない。人知を超える次元の中で、人々は多くの生き物の声を耳にし、天地を統べる「農」に挑戦する心を日々新たにしているのではないだろうか。月夜に刈り取る「ほまち田¹¹⁰⁾」の収穫には格別の思いが込められている。

『会津歌農書』上之末

(六五) 月前田刈

さやけしな今宵の月の晴るゝよに いざ我がほまち行てからなむ
佐瀬 [1982b], p.101)

110) 「ほまち田」(穂末田)とは「内職に耕して自分の収入にする河川の中州などに開いた田」(松村明 [2006], p.2.357)を意味する。中世武士団の流れを汲む幕内の農民(高持の本百姓)たちは、寛文五年の検地後も貢納義務を免除された隠田(ほまち田)の耕作を従前の経緯をふまえて黙認されていたと考えられる。蓋し、ほまち田の収穫作業に関する和歌が農業指導書の中に公然と詠まれているばかりではなく、それらは頻繁に洪水被害を受けやすい河原や中州にあり、年貢割当ての根拠となる平年作収量の算定が困難であったと推測されるからである。

引用文献

- [1]ハーディング, W.・山口晃訳『ヘンリー・ソローの日々』, 日本経済評論社, 2005.
- [2]長谷川吉次編 [1968], 『会津農書』, 佐瀬与次右衛門顕彰会.
- [3]菟川信弘 [1998], 「書評 古野隆雄著『無限に広がる アイガモ水稲同時作』」, 『農業経営研究』, Vol.35, No.4
- [4]菟川信弘 [2016], 「地域農業システムの持続性に関する考察」, 『総合政策論集』, 東北文化学園大学.
- [5]石川英輔 [1997], 『大江戸リサイクル事情』, 講談社
- [6]石川英輔・田中優子 [2002], 『大江戸生活体験事情』, 講談社文庫.
- [7]石川英輔 [2005], 『大江戸庶民いろいろ事情』, 講談社文庫.
- [8]伊藤詔子 [2017], 『はじめてのソロー-森に息づくメッセージ』, NHK 出版.
- [9]岩井克人 [2015], 『経済学の宇宙』, 日本経済新聞出版社.
- [10]河北新報 [2016], 跡部裕史「身不知柿不作の危機」, 2016年6月28日(火曜日)16版, 26面(社会面).
- [11]コックラル=キング, J.・白井和宏訳 [2014], 『シティ・ファーマー』, 白水社.
- [12]小森陽一編著 [2016], 『夏目漱石, 現代を語る』, 株式会社 KADOKAWA.
- [13]松村 明 [2006], 『大辞林 第三版』, 三省堂.
- [14]農山漁村文化協会編 [1993], 『安藤昌益 日本・中国共同研究』, 農山漁村文化協会.
- [15]佐々木長生 [1992], 「幕内の農業技術-『会津農書』にみる農業技術の変遷」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』第43集, 国立歴史民俗博物館.
- [16]佐々木長生 [2008], 「経験科学としての『会津農書』-陰陽五行説と農業技術-」, 『磐城民俗』第35号, 磐城民俗研究会.
- [17]佐々木長生 [2009], 「『会津農書』の民俗世界」, 『福島の民俗』第37号, 福島県民俗学会.
- [18]佐々木長生 [2009], 『会津若松市史25人の一生と暮らし』, 会津若松市.
- [19]佐々木長生 [2015], 「『会津農書』にみる畑作民俗誌」, 『福島県立博物館紀要』第29号.
- [20]佐瀬与次右衛門 [1982a], 庄司吉之助・長谷川吉次・佐々木長生・小山卓現代語訳『日本農書全集第19巻』, 農山漁村文化協会.
- [21]佐瀬与次右衛門 [1982b], 長谷川吉次・小山卓現代語訳『日本農書全集第20巻』, 農山漁村文化協会.
- [22]庄司吉之助 [1956], 『佐瀬与次右衛門著 会津幕内誌 佐瀬与次右衛門著 佐瀬家記録』, 大盛堂印刷所.
- [23]白石 弘 [2016], 『夏目漱石 没100年の読み直し』, ダイアプレス.
- [24]漱石文学研究会 [2016], 『エンサイクロペディア 夏目漱石』, 羊泉社.
- [25]田尻祐一郎 [2011], 『江戸の思想史』, 中央公論新社.
- [26]田尻祐一郎 [2016], 『こころはどう捉えられてきたか』, 平凡社.
- [27]竹林 滋 [2002], 『研究社 新英和大辞典 第6版』, 研究社.
- [28]武田友宏編 [2007], 『方丈記(全)』, 角川学芸出版.
- [29]ソロー, H.D.・飯田実訳 [1995a], 『森の生活(上)』, 岩波書店.
- [30]ソロー, H.D.・飯田実訳 [1995b], 『森の生活(下)』, 岩波書店.
- [31] Thoreau, H.D. [1995] "Walden; or Life in the Woods", Dover Publications, Inc.

- [32]ヘンリー・D・ソロー著・今泉吉晴訳 [2004], 『WALDEN 森の生活』, 小学館.
- [33]山田 舜 [1956], 『日本封建制の構造分析』, 未来社.
- [34]長谷川吉次編 [1968], 『会津農書』, 佐瀬与次右衛門顕彰会.
- [35]八木洋憲 [2008], 「都市農地における体験型農園の経営分析」, 『農業経営研究』, Vol.45, No.4
- [36]小森陽一 [2013], 『仙台で夏目漱石を読む』, 荒蝦夷.
- [37]小祝政明 [2005], 『有機栽培の基礎と実際』, 農文協.

【附表】世界農業遺産 (GIAHS) の認定基準と評価の視点 (抜粋)

| FAO の認定基準 | | 評価の視点 | |
|-----------|------------------------|--|--|
| 1 | 特徴 | <p>人類の遺産として世界的な重要性があり、総合的価値を持つ伝統的・歴史のかつ地域限定的な農業システムである。5つの基準 ①食料・生計、②生物多様性・生態系保全、③知識・技術、④文化・組織、⑤景観・資源の関連性。各要素がポジティブな連携を保ちながら統合的システムとして機能している。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●世界に類を見ない、日本を代表する伝統的、特徴的な農業・農法(以下「伝統農業」と略記)である。 ●伝統農業を核とした持続可能なシステムの構築。 ●FAO 必須5基準の均衡ある相互連関性。 ●地域の設定の適切さ、タイトルの適切さ(農業システムのコンセプトを表現)。 |
| 2 | (1) 食料及び生計の保証 | <p>地域社会の食料及び生計の保障に貢献し、その生計源の大部分を占める。但し、レジリエンス(回復力)のある食料及び生計システムを構築する地域社会間での供給と交換を含む。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●伝統農業や関連産業は地域住民の重要な生計手段。小規模農家、家族農業の持続性。 ●伝統農業や関連産業の安定性、雇用創出力、農業関連産業間の連携。 |
| | (2) 生物多様性及び生態系機能 | <p>農業の生物多様性及び遺伝資源(生物種、品種、血統)、農業システムや景観等に関わる生物多様性など、生態系便益の共有に関する規範的な取り決め等に関わる社会組織及び機関の維持。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●希少種、固有種等の生息、生物多様性の保全。 ●営農を通じた遺伝資源の保全。 ●農業の多様性(作物、規模等)。 ●農業システムと生態系機能(生態系サービス)との関連性。 |
| | (3) 知識システム及び適応技術 | <p>豊かな知識、生物相、土地・水等の天然資源の管理体制及び独創的な技術の維持。農業生態系管理の慣習的な機関及び資源へのアクセスの維持、生態系便益の共有に関する規範的な取り決め等に関わる社会組織及び機関の維持。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●地域の環境に適応し、地域資源を保全する優れた知識や技術。 ●伝統的知識や技術の継承。 ●資源へのアクセスや利益配分を調整する慣行。 ●知識や技術を継承するための社会組織や機関の存在。 |
| | (4) 文化、価値観及び社会組織(農文化) | <p>環境と農事暦に関する世界観や価値体系を知識として移転する祭礼・儀式が農文化として慣習化されている。地元の機関が環境と社会経済的な目標とのバランス、レジリエンス(回復力)の強化の重要な役割を担い、農業システムの機能のためのすべての重要な要素とプロセスを再生する役割を担っている。①天然資源へのアクセスや保全、公平な利用の促進を確保している。②生物多様性、土地、水の保全を促進するような伝統的知識システムと重要な価値を伝達している。③計画、連携とイノベーション・適応を促進している。但し、地元の機関は、①タブー、儀式・祭礼等の宗教的な信仰と慣習、②資源保有に関する慣習法や紛争解決、③血縁関係・婚姻や継承体制、④意思決定や連携を率いるリーダーシップ、⑤口伝えや記録された伝統、⑥教育や指示を与える手段及びゲーム、⑦性別の役割と特殊機能を含む役割分担及び労働分担、などさまざまな形をとることができる。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●地域における伝統的、文化的、精神的、宗教的、社会的な取り組み。 ●農業システムに関連した農耕祭事・神事等の文の継承。 ●農文化や価値観を継承するための社会組織の存在。地域住民を対象とする教育や社会行事等。 |
| | (5) 優れた景観及び土地と水資源管理の特徴 | <p>入り組んだ田畑の土地利用、灌漑・水管理システム、段々畑、特定の生態系に適応した建築物等環境または社会的制約を解消するための独創的で実際の解決策を講じている。また、資源保全や重要な生物多様性、総合的レクリエーション価値や非営利的な用途(生態系の美学的、芸術的、教育的、精神的及び科学的な価値)を提供している。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ●農業システムと周辺環境が一体となる優れた景観。 ●景観を構成する土地、水資源がレクリエーション価値や歴史的価値を持ち、有効に活用されている。 ●優れた景観や生物多様性の保全が営農を通して保全されている。 |

| FAO の認定基準 | | 評価の視点 |
|-----------|-------------------------------------|---|
| 3 | (1) 農業システムの管理に関するその他の社会的・文化的特徴 (任意) | ● 地域特有の食文化や建築様式など、農業システムに関連した社会的・文化的特徴。 |
| | (2) 歴史的な重要性 | ● 地域の歴史において、農業システムが長期にわたり重要な役割を果たしてきた。 ● 日本の農業史、社会史に照らし、地域の農業システムは特徴的な内容を持つ。 |
| | (3) 現代的な重要性 | ● 農業システムが生物多様性の保全、開く変動への対応など、現代的な課題に貢献している。 ● 農業システムが他の地域に応用できる有益な農業・農法の活動事例を持つ。 |
| | (4) 脅威と課題 | ● 社会・経済的および環境的な脅威とその影響が適切に示されている。 ● 脅威を克服するための具体的な対応策が提案されている。 |
| | (5) 実践的な考慮 | ● 農業システムを保全するための持続的な活動が行われている。 ● 地域内外の利害関係者(ステークホルダー)の役割が明確化されている。 |
| | GIAHS 認定地域の活用・保全計画 | ● 活用・保全計画の柱立てが適切になされている。 ● 活用・保全計画の実行を担保する措置(予算措置、モニタリング等)や組織が組み込まれている。 |

【註】農林水産省 HP (http://www.maff.go.jp/j/nousin/kantai/pdf/bessi6_betten.pdf) に基づいて作成。

